1996年の新春を迎えて

New Year's Greeting

社団法人 SHM 会長 川 西 剛*

明けましておめでとうございます。

昨1995年は日本にとって受難の年といってもよい年でした。天災や社会的ないろいろの問題、政治の空白、景気の低迷、円高の定着等々。しかし、この厳しさの中で我々はいろいろのことを学んだと思います。

特にマイクロエレクトロニクスの分野では、従来の単なる How to Make, Where to Make といった製造業的思考に加え、What to Make, What to Define といった創造業的発想をプラスして日本の21世紀に向けての活路を見出すべきだということ、そして技術の高度化、複合化、事業のグローバル化に伴う自己完結型ビジネスの終焉はトランスナショナルな戦略提携の必要性をもたらしたと、さらに製造プロセスもスキルに頼り、メーカーの秘伝の時代からまさしくサイエンスの時代に入ったという認識になったことなどです。

幸いマイクロエレクトロニクスの分野では、世界の各地域、各企業が競争だけでなく協力の上でも依存し合い結合し合っていること、しかも平和的なやり方においてそれが推進されていることは人類の進歩のために大変慶賀すべきことだと思います。

先日、ロスアンジェルスで開かれた ISHM'95に出席して特にそのことを強く感じました。数千名の各国から

の参加者が、熱心さ真剣さ、かつ和気あいあいの雰囲気の下で討論を行っていたこと、日米欧だけでなく、東南アジア、インド等世界に大きく拡がって来たこと等々です。

私は常々技術の真の発展のために必要な3つのこととして、

1. 自己の技術を限りなく高める努力をすること
2. その技術と信条を世界に問うこと
3. ナショナリズムでなくグローバリズムであることを信じておりますが、その精神が ISHM'95で完全に生かされているのを目の当たりに致しました。

私が SHM 会長をお引受けしてから2年が経ちました。そしてこの協会が大変真面目で真剣で、また若い人を中心に、日本のマイクロエレクトロニクス技術の深耕のために意欲的、献身的な努力を払っていることに大きな敬意を表して来ました。

これからの会長としての私自身の課題としては、これらのよき伝統の上にさらに経営的基盤を安定させ、また国際交流を含めて他の類似の協会との協力の推進があるかと思います。理事の方々、会員の皆様方の総意を旨として、SHM 協会の真の発展のために一層の努力を致してまいりたいと思います。

新しい年に当たり、新しい決心と新しい発想と一緒に努力しようではありませんか。

* Tsuyoshi Kawanishi
当協会会長、(株)東芝 常任顧問